

【曲目解説】

交響詩「前奏曲」は、リストの交響詩 13 曲の中で、最も有名なものであり、最も成功した作品となっています。この交響詩の自筆楽譜には序文が付けられています。パリ時代に交流のあったフランスの詩人・政治家ラマルティエヌの「詩的瞑想録」の一節が利用され、曲の内容を暗示しています。

「我々の一生は、その厳粛な第 1 音が死によって奏される未知の歌への一連の前奏曲でなくてなんであらうか。愛は、あらゆる存在の輝かしい朝焼けである。しかし、荒々しい息吹が愛らしい幻想を吹き散らし、烈しい電光が祭壇を破壊してしまう嵐によって、幸福な喜びが遮られないような運命が果たしてあるだろうか。そこには、その嵐によって深く傷つけられた魂が見出されるであろう。そのような嵐の後、田園生活の心地よい静けさの中で、過ぎ去った嵐を忘れようと努めない者があるだろうか。それにもかかわらず、人はその柔らかい自然の慈悲深い平穏の中に長い間身を任せることには堪えられなくなる。そして、『警報のトランペットが鳴り響く』と、彼を呼ぶ戦いがどのようなものであれ、その戦いの中で、自分の人生の意義と自分自身の価値と能力の把握と獲得を再び目指して、彼は危険な戦場へと急ぐのである。」このように、この曲は具体的な劇などに対する音楽上の前奏曲ではなく、人生を死への一連の前奏曲（曲名は、*Les preludes* と複数形で書かれています）という詩の内容を表すものとなっています。曲は、ラマルティエヌの詩に従い、「春の気分と愛」「人生の嵐」「愛のやすらぎ、平和な牧歌」「人生の戦いと勝利」という四つの部分から成っています。初演はリスト自身の指揮で、1854 年 2 月 23 日（今日は初演後 149 年）、ワイマール宮廷管弦楽団の年金基金募集音楽会で行われました。

フォーレの「ドリー」は、もとはピアノ 4 手連弾の組曲として、1893 年から 1896 年にかけて断続的に作曲されました。「ドリー」とは、フォーレと交際のあったバルダック家の幼い娘の愛称で、彼女に捧げられています。そのためか、フォーレとしてはやさしい書法で書かれ、演奏上も難しい箇所はほとんどありません。この作品の出版は 1897 年で、その際フォーレ自身がつけた題名と若干変更されています。2 曲目は、バルダック家の娘・ドリーちゃんが兄を呼ぶ「*Messieu Raoul*」がうまく言えず、その言い方をフォーレは題名にしたのですが、出版社が猫の擬音に変えました。4 曲目は「キティ」ではなく、「ケティ」で、それはドリーの兄の愛犬の名前です。このように付き合いの深いバルダック家の様子を温かく描いた作品と言えましょう。なお、本日演奏するのは、ラボーによって 1906 年に管弦楽に編曲されたものです。

前回の演奏会で取り上げたベートーフェン（ベートーヴェン）の第 1 交響曲は、1800 年 4 月に初演されています。この 1800 年に至る数年間は、ベートーフェンにとって最良の時であり、正に上り坂を一気に駆け上る得意の人でありました。先ず最初はピアニストとして、次には作曲家として、その名声は、世界の音楽都市ウィーンにおいて確立されました。その行く手を遮るものは何一つないように思われました。しかし、人間が向上するためには抵抗が必要であり、ベートーフェンがさらに偉大な芸術家となるためには、やはり大きな抵抗にぶつからねばならなかったのです。その大きな抵抗とは周知の通り、耳の病気でした。1796 年頃からと推定される耳の故障は 98 年頃から次第に激しくなり、耳鳴りや聞こえが悪くなるといったことがしばしば起こってきたようです。一時的現象であろうと思い、そう望み、いろいろの手当てをしたにもかかわらず、耳疾は悪化の一途をたどり、ベートーフェンは、1802 年、かの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」を書くに至ります。このような年に第 2 交響曲は書かれているのです。この曲は、しかし、そのようなベートーフェンの苦悩をそのまま反映しているようには見えず、むしろ力強く、明るさに満ちています。そこに、ベートーフェンとジュリエッタ・ギッチアルディとの恋愛の喜びを見る評者もいます。当時 16 歳の、魅惑的な美少女への愛は、友人ウェーゲラーにあてた手紙にも明かです。しかし、それ以上に、苦悩からより大きなものを紡ぎ出した芸術家の精神の強さを見るべきかもしれません。